特集 破裂脳動脈瘤は解決されたか

破裂脳動脈瘤は解決されたか？

— 緒 言 —

第24回日本脳卒中の外科研究会会長 斎藤 勇

“Have the Problems of Ruptured Cerebral Aneurysms been Solved ?”

Introduction

Isamu SAITO, M.D.

*Department of Neurosurgery, Kyorin University School of Medicine, Mitaka,
Tokyo, Japan*

はじめに

近年、わが国においては脳卒中による死亡が減少し、一見脳血管障害の治療法と予防法はほぼ完成したのではないかという幻想さえ抱かせるに至ったが、果して現状はいかなるものであろうか？ 特に、脳動脈瘤の破裂によるクモ膜下出血 (SAH) に関しては、むしろ増加の傾向にあり、その治療成績は 20 年前に比し向上したのであろうか？

第 1 回の脳卒中の外科研究会の主題が「破裂脳動脈瘤早期手術重症例の処置」であったのを鑑み、以来 23 年間のこの疾患に対する病態診断と治療法の面で大きな進歩が見られ、一見して解決した感があるが、いまだに決して問題は少なくないこの破裂脳動脈瘤の現状を明らかにすることを、今回の第 24 回日本脳卒中の外科研究会開催の目的とした。

この目的のために、「破裂脳動脈瘤は解決されたか」という主題を掲げ、これにかかわるすべての課題を取り上げて討論していただくこととした。すなわち、1) 脳動脈瘤の自然歴、2) 破裂脳動脈瘤の術前・術中・術後の管理、3) 手術のタイミング、4) 脳血管攣縮を中心とした合併症

の対策とその結果、5) 急性期の手術法、6) 高齢者、7) 重症例の病態と治療、8) その他の諸問題、など、シンポジウムとラウンドテーブルディスカッションで徹底的に議論を重ねていただくこととした。

また、今回の特徴として、演題の基本データは「1994 年の 1 年間の全症例の成績を基にして」とすることで、最新の治療成績を出し合うことにより、現状が一層明らかになると考えた。

特に、シンポジウム 1 「破裂脳動脈瘤は解決されたか」(すなわち、この特集) は、研究会の冒頭に設定した主題そのものをテーマとしたが、ここでは本研究会でどのような問題が論点になるかを総括するもので、会長自ら座長を務めさせていただいた。

このシンポジウムが目指したものは次の 3 点に要約される。

1. この研究会で取り上げられる破裂脳動脈瘤の諸問題のすべてを網羅する。

上記の諸問題について、入院→術前管理→手術→術後管理という流れに沿って、その間に生ずる諸問題を含んでシ

ンポジストがどれかを取り上げる，すなわち，

- 1) 脳動脈瘤の自然歴，特に，破裂した場合の
natural history —塩川芳昭
- 2) 術前管理，特に，転送時の再出血の予防に
ついて —井上正純
- 3) 手術時期について —安井信之
- 4) 意図的な待機手術の場合の治療成績について
—米倉正大
- 5) 急性期の手術法，術中管理について
—加藤庸子，上山博康
- 6) 脳血管攣縮以外の合併症 —谷川達也
- 7) 脳血管攣縮の予防と治療
—上津原甲一，東保 肇，溝井和夫
- 8) 高齢者 —溝井和夫
- 9) 重症例 —橋本信夫

- 10) テント下動脈瘤の急性期処置 —佐々木雄彦
- 11) 急性期の血管内手術 —衣笠和孜
等である．

2. ここでは，「それぞれ何が問題点か」を指摘することを目的とし，その問題点についての討論とある程度の結論を導くことは各セッションにお任せする．

3. シンポジストのうち，11 の施設の方々には，1994年の SAH の例を prospective に登録していただいた．そして，ここでは 3 か月後の転帰の判明としている 1994 年 10 月末までの分を集計させていただいたものと，本研究会の特別講演をお願いした Virginia 大学の Kassell 教授が総括責任者で 1980 年から行われた International Cooperative Study on Timing of Aneurysm Surgery の結果と対比して，現在なお未解決の問題を一層明らかにする，等である．